櫛が媒介する生理的嫌悪感

—櫛に関する共用意識についての一考察—

郭　睿麒

1　はじめに

本論はある特定の 2 つの文化圏を対象とし、両者における櫛というモノの共有意識に関して、インセストの観点から考察を行ったものである。本論で対象としたのは中国（漢族）と日本であり、両社会とも基本的に髪質や櫛の使用方法に関して大きな相違はない。

筆者は櫛というモノのどの性質、また特徴が人間を動かす可能性があるかということを調査するために、櫛の材質、使われた期間、使用する人の髪の長さ、使用する人の髪型と共用の関係を問うアンケート調査を、中国山東省の済寧技師学院と日本の山口大学で行った。アンケート調査の目的は、いくつかの調査結果の分析を通して、櫛はモノとしてのどの性質が使用者に影響を与えているのかを考察することである。結論を先取りすると、櫛を共用することへの生理的嫌悪感において、分析の結果、女子学生は「父への嫌悪感は母より高い」こと、「異性キョウダイへの嫌悪感は同性キョウダイより高い」こと、そして「両方の女子学生とも同性友達との共用可能率が高い」という 3 つ興味深い結果が出た。

本論は上述した 3 つの興味深い結果から、櫛の共用可能性率の差異を議論の中心に据え、櫛が媒介する生理的嫌悪感をインセスト回避と親密さという 2 つの視点から考察するものである。具体的には櫛の共用に相関するデータを分析し、データ分析から現れた生理的な嫌悪感を考察していく。以下、2 節では、生理的・社会的インセストの概念と論争を整理し、生理的なインセスト研究の方法論の可能性を提示する。3 節では、ゴリラやチンパンジーの毛づくろい事例をはじめ、R・ダンバー（R. Dunbar）や山極寿一の研究に基づき、親密さが影響する要素を提示する。4 節では、アンケート調査の概要を紹介し、櫛の共用に関するデータ分析の結果を示し、櫛が媒介する生理的嫌悪感のデータ上の特徴を示す。5 節では、櫛が媒介する生理的嫌悪感をインセスト回避と親密さという 2 視点から考察する。そして最後に、今回のアンケート調査におけるデータ分析によって、インセスト回避と親密さの視点から見れば、櫛が媒介する生理的嫌悪感はこれまでの研究結果を補完しうる事例のひとつであることを指摘する。つまりモノとしての櫛はこれらの先行研究と照らし合わしても、生理的嫌悪感を運ぶエージェント（行為主体）であることが本データに限っては明らかとなる。

本論が特に力点を置くのは、中国（漢族）と日本にある 2 つの母集団では櫛が媒介する生理的嫌悪感のいくつかの特徴は、インセスト回避と親密さとが部分的に合致するということである。本論は、アンケート調査から得たデータに限って、櫛が媒介する生理的嫌悪感に関するデータを分析するものであり、本調査データ以外における生理的・社会的インセスト研究と親密さ研究に関して、広く一般性を肯定するものではないことを予め断って

おく。

2　「インセスト」をめぐる研究の概観

本論はインセスト回避の視点から、櫛が媒介する生理的嫌悪感を考察していくが、その前にインセストをめぐる研究史について簡単に概観しておきたい。これまで数多くの研究者がインセストやインセスト・タブーについて議論を重ねてきており、彼らはさまざまな角度から多くの概念を用い、異なるかたちでインセスト現象を定義してきた。本節ではインセストの研究史の一端を、主にJ・シェファー（J. Shepher）による整理をもとに簡単にレビューしておくことにする（J. Shepher 1983）。

2.1　起源と論争

「インセスト」という言葉は、ラテン語の「incestum」から派生したもので、家族内近親者の間で発生する性交渉を意味している（J. H. Turner 2012: 26）。インセスト研究の系譜は大きく生理的なインセストと社会的なインセストに分けられるが、両者は重なる部分も多いため、ここでは敢えて両者を分けずに大まかな研究の系譜として論じる。

生理的なインセスト研究における、基本的な論争は一般に、E・ウェスターマーク（E. Westermarck）とS・フロイト（S. Freud）に端を発する。E・ウェスターマークによると、人間は元来インセストを欲求するものではなく、インセストは忌避すべきものであるために禁止された、と主張されたが（E. Westermarck 1891 [1921]）、S・フロイトはインセストは人間の原初的な欲求であるとした（S. Freud 1913）。たとえば、S・フロイトは『トーテムとタブー』（S. Freud 1913）の中で、トーテミズム以前の原始社会では、父が部族すべての女性を独占していた、と論じる。しかし、息子たちは部族内の女性に愛着をもったため、父を殺し、父の肉を食べた。父の肉を食べると、息子たちは父の力が得られると思ったが、「罪悪感」しか得られなかった。その結果、息子たちは父の独占から解放された女性たちとの結合を諦め、原父殺害のことを銘記するため、父というトーテムを象徴する動物の殺害を禁止したという「原父殺害物語」に起因するインセスト論を提示した。

一方E・ウェスターマークの主張はフレイザーによって次のように強く批判された。すなわち「法律は、ただ人の本能の使役でしたいと思っていることを禁止する。そのため、インセストを禁止するという法律から、人はインセストについて自然な嫌悪感があると仮定するより、むしろ人はインセストについて自然な傾きがあると仮定するほうがよい」とJ・フレイザー（J. G. Frazer）は指摘した（J. G. Frazer 1910: 97）。

またS・フロイト理論の研究者C・バドコック（C. R. Badcock）は「人はインセストに惹きつけられると同時に、インセストに排斥させられている。両方とも生物の天性である」（C. R. Badcock 2002: 273-275）と両義的な視点を議論に加えている。J・シェファーは『インセスト—生物社会的展望』（J. Shepher 2013）の中で、従来の研究を踏まえた上でインセスト回避の起源について、「インセスト回避は外部からの強制や知的理解のいずれに

も先行している」（J. Shepher 2013: 11）と主張しており、言い換えれば生理的なインセスト回避自体は人間にとってア・プリオリ[1]に存在するものであるという。

生理的なインセストから波及して社会的なインセストについても簡単に触れておきたい。社会的なインセスト研究において、B・マリノフスキー（B. Malinowski）は、インセスト・タブーの起源について社会学的議論を提示した嚆矢の一人といえる。彼は親族関係規則の出現に関するより一般的な分析によって、インセスト・タブーの説明を試みてきた。彼の議論の中心は、インセストが核家族のメンバー間に新たな役割混乱と対立を生み出すということにあった（B. Malinowski 1927）。つまり核家族を持続するために、インセスト・タブーが生じたと彼は整理したわけである。同じように T・パーソンズ（T. Parsons 1954）の理論によると、「インセスト回避」は家族内の性的緊張を緩和し、その性的エネルギーを家族外へ推し進めるという役割を果たしているという。

そして、人文社会学全般に大きな影響を与えた C・レヴィ＝ストロース（C. Lévi-Strauss）は、「『近親婚』[2]の禁止は両性間の関係に関する限り、『人は何をしてもかまわないわけではない』ということを集団的に確認するだけである。この禁止の積極的な側面は組織を始動させることである」（C. Lévi-Strauss 1977: 118）と論じた。さらに、「ゴリド族にあっては、女は母の兄弟の息子と結婚することはできない。というのは、そのことは『彼女の母の血を母のクラン[3]に運び返す』ことになるであろうから。しかし、男が自分の母の兄弟の娘と結婚することはまったく可能なのである。かくのごとく、彼にすでにその血を与えた母方のクランは『新鮮な血』を、それも『同じ起源の血』を彼の子供たちに提供しつづける。一般交換の原理をこれ以上に強く、またこれ以上に明瞭に表すことはできないであろう」（C. Lévi-Strauss 1977: 546）と指摘し、社会的なインセスト・タブーは交換に起因すると主張した。

本論ではインセスト回避に関するすべての研究を紹介することはできないが、現在までの研究は基本的にインセスト・タブーの社会的機能や原因に議論が集中することが多く、大量の実証的なデータ、長期間にわたる観察が行われてきた。本論ではアンケート調査のデータを用いて櫛が媒介する生理的嫌悪感を考察するが、ここではそれが生理的インセストであるか、或いは社会的に構築されたイメージとしての「生理的インセスト」であるかの区分は明確には行わず、両者の可能性を残したまま議論を進めることを予め断っておく。

2.2　インセスト・タブーのダイアド[4]

前節で概観したように、今日までさまざまな角度からインセストについて多くの議論がなされてきた。インセストを研究対象とした彼らは、多様な角度からインセストについて解釈を行ったが、ここでは最も広く使われている 2 つのインセスト・タブーの定義をまとめ、より一般的なインセスト理解について整理しておく。

1 つ目は、「核家族メンバーの間で性行為と結婚を禁止することで、すべての社会習慣または法律における、そのタブーの普遍性を説明するのが難しいと広く知られている」（A. M.

Colman 2001: 4725）というものである。

2 つ目は、「インセストは、夫と妻の関係を除き、核家族内の 2 人のメンバー、すなわち両親と子供または兄弟姉妹の間での性的な関係に関するタブー、違反行為である。タブーは、他の具体的な親族、または近親的なカテゴリー関係の中で、2 人の近親的なメンバーが生物学的、婚姻的、類別的な、または架空の性的な関係がある親族を含む範囲まで、インセスト範囲内に含むべきである」（M. Mead 1968: 115）、というものである。

筆者は以上の 2 つの定義を参照しながら、核家族における各種のインセスト的ダイアドを以下の表 1 のようにまとめた。

表 1 インセスト的ダイアド

関係者	性　　別	家族内での関係	年　　齢
父と娘	男と女	男性＝親　　女性＝子供	男性＞女性
母と息子	男と女	男性＝子供　女性＝親	男性＜女性
父と息子	男と男	男性＝親　　男性＝子供	男性＞男性
母と娘	女と女	女性＝親　　女性＝子供	女性＞女性
兄弟と姉妹	男と女、男と男、 女と女	男性＝子供　女性＝子供 男性＝子供　男性＝子供	男性＜or＞or＝女性 男性＜or＞or＝男性 女性＜or＞or＝女性

＊表 1 は筆者が上述の定義を参照して作成した。

以上の 2 つの定義を比較すると、インセスト関係者の範囲とインセスト行為の範囲には異なる部分がある。どの定義を選択するかは、本論の討論範囲とも関連することになるが、M・ミード（M. Mead）の定義を採用する場合、家族のメンバーと櫛を共用することはインセスト内でモノを共有するということとなる。A・コールマン（A.M. Colman）の定義はタブーの普遍性を明確にしておらず、その普遍性を説明することの難しさを提示するものでもある。そのため、本論は単純に以上 2 つの定義の 1 つを採用することはしない。本論はインセスト関係者の範囲とインセスト行為の範囲には異なる部分があるということを念頭に置いて、調査データが示した特徴に限って櫛が媒介する生理的嫌悪感を考察していく。

2.3　インセスト研究方法の難関と啓示

インセストを研究すると、1 つの典型的な問題に直面する。それはインセストに関する性的経験を考察しなければならないことである。その一番理想的な方法は性的行動や性行為の経験を調査し、その性行為のデータからインセスト行動に焦点を当てることである。しかし、人間の性的経験に近ければ近いほど、調査を実施することは難しくなる。そのため、インセスト研究者はインセスト自体ではなく、インセストに関連のある行為やモノに

ついて考察することが少なくない。たとえば、J・ルンドストレーム（J. N. Lundström）などが行った実験（J. N. Lundström2009）では、女性自身の主観的判断とは別に、脳が父親の臭いを識別し、嫌悪していることを実証した。この実験の方法については、以下のようにまとめることができる。

a　出産経験がなく、鼻に異常がなく、喫煙しない右利きの 12 人の健康な女性を選び、彼女らを被験者とした。
b　各被験者の姉妹、友達、そして面識がない人に 7 日間、独りで寝、その時、体に同じぴったり合うＴシャツを着てもらった。寝る時間以外はＴシャツを密封袋に入れて保存させた。匂いを収集するために、Ｔシャツの脇の部分にパットをつけた。
c　各被験者の姉妹、友達、面識がない人の匂いが付いたものを一緒に提示し、それぞれ匂いを嗅がせて、匂いを識別させた。その際、脳の活動も記録した。

この実験の結果において、J・ルンドストレームは「私達は、親族認識が意識的な親族認識から独立しているということを初めて証明した。従って、この反応は一種の進行中の非意識的なプロセスである。神経原の反応は個人出所の意識的な識別と関係がなく、人類は他の哺乳動物のように、匂いで血縁を測定するシステムがあることを突き止めた。数多くの種類の動物に遍在する進化現象である親族認識は、交配の縁故と回避を促進することによって、個々の遺伝子を促進すると考えられている（J. N. Lundström 2009: 2571、2579）」と主張した。つまり、多くの他の哺乳類と同じように人間も、親族に対する認識は主観的で意識に発生したプロセスではなく、一種の無意識のうちに行われているプロセスだという結論を提示したのである。

この実験では、社会的機能や原因からの視点ではなく、単純にＴシャツを媒介物として、匂いで親族を認識するということを捉えた。もちろん櫛はＴシャツとはまったく異なるものである。しかしＴシャツと同じように、日常生活において皮膚と密接に関係するモノとして、特異な媒介物であると考えることができる。本論ではこのような視点から、インセスト回避を媒介するモノとしての櫛の可能性を考察する。

3　親密さの視点

技師学院と山口大学の女子学生には、両方とも同性友達との共用可能率が高いという特徴が現れた。本稿ではアンケート調査の分析結果を提示した後、櫛が媒介する生理的嫌悪感の差異が「（直接的・間接的な）身体接触を伴う親密さ」（以下、「親密さ」と表記）に起因するという可能性を考察する。そのため、「親密さ」の影響要素についてここで予め概観しておく必要があるだろう。本節ではＲ・ダンバーや山極寿一の研究に基づき、「親密さ」に影響する要素を提示する。

人間は自己意識が高い生物で、触られることを好まない。その原因は複雑で、はっきり

説明することができないが、猫との接触は議論を進める上でひとつの手がかりとなる。たとえば、筆者の経験からすると、ほとんどの猫は初対面の人に対して、強い警戒心を持っているような態度を示す。そのため、初対面の猫をすぐ撫でることはなかなか難しい。やさしく猫の目を見ながら、柔らかく「ミャ～」と声をかけると、時々猫が近くに来ることもある。その際、場合によっては猫を撫でることができるかもしれない。このように猫とのコミュニケーション、あるいは何かしらの応答で関係性を構築することによって、猫の人に対する警戒心を緩め、撫でることができる場合もある。

人間も同じように、初対面の人に触られることを好む人が多いとは言えない。人により違いもあるだろうが、一定程度のコミュニケーショあるいは関係性を構築しないと、(一般論ではあるが）相手に触ることはできない。オックスフォード大学の進化人類学研究者のダンバーは人間の接触について、「わたしたちがいやなのは、誰かれ構わず触れることだ。……親密な接触は二人のコミュニケーションを新しい次元へといざなってくれる」（R.Dunbar 2011: 56）と指摘する。

次にゴリラやチンパンジーによくする行為である毛づくろいを見てみよう。霊長類研究の大家である山極寿一によると、ゴリラやチンパンジーの群れ社会では、毛づくろいは一種の互酬的な行動であるという。血縁関係にあるメスたちは互いに毛づくろいをし合っており、トラブルが起きた時などは、毛づくろいしあう同士が協力して敵に立ち向かう。山極はこのような日常的な身体接触を通して、互酬的な関係を築くという社会的な視点を提示した（山極 2012 : 229 - 230)。加えてダンバーもまた、毛づくろいについて「仲良し同士のマッサージというのが真相で、指先で皮膚を刺激すると、脳内にエンドルフィンが放出される」(R.Dunbar 2011: 57) と説明する。エンドルフィンは脳が作った鎮痛剤であり、幸せな気分にさせる作用がある。

人間も同じく、触れ合いは人に対してとても重要なことである。したがって、「親しく感じる相手には、手で触れたい、なでたいという強い欲求が湧きあがって止めることはできない。親しくなれた相手に最初にしたくなることが触れあいである」とダンバーは主張する（R. Dunbar 2011: 57)。

ダンバーによれば、エンドルフィンの放出は触れ合いに対する一つの現象だという。ダンバーは「音楽はエンドルフィン放出の引き金にもなっている」ことを指摘し、エンドルフィンは幸福感、満足感と深く関わっている物質であり、こうした感覚は社会的な結び付き、社会的なプロセスにおいても重要な役割を果たしていると述べる。さらに彼は、人間の場合、言葉も一種の遠隔的な毛づくろいであり、いろいろな意味で毛づくろいと同じ役割を果たしていると主張した（R. Dunbar 2011: 66)。以下では櫛が媒介する生理的嫌悪感についてのデータを提示し、そのデータに基づき、それが「インセスト回避」あるいは「親密さ」に起因する可能性があるという観点から考察を進めていく。

4　アンケート調査から見る櫛が媒介する生理的嫌悪感

本節では、櫛が媒介する共用への生理的嫌悪感に関するデータを分析し、データ上に現れた特徴を考察していく。

4.1　アンケート調査の概要

今回のアンケート調査は、櫛のモノとしての性質、櫛の材質、使われた期間、使用する人の髪の長さ、使用する人の髪型と共用の範囲を考察するのが元来の目的であった。そのため、本アンケートの準備段階では生理的・社会的インセスト研究を目的として行ったのではない。そのため社会学的なインセスト調査としては、母集団の設定や各設問の設定に不的確なところがあり、データの抽出方法に関して必ずしも適切なものではないことを予め断っておきたい。ただし、今回のデータの分析結果から櫛というモノが有する、特定の人との間でみられるインセスト傾向は非常に強く、本データがインセスト回避（あるいは「親密さ」）を考える上で示唆的であることは無視できない。以下、本論は上述のことを考慮しながら、論を進めていく。

アンケート調査は 2018 年 4 月 9 日に日本の国立大学法人山口大学（以下、山口大学）で実施し、2018 年 6 月 11 日に中国の山東省済寧技師学院（以下、技師学院）で実施した。テーマは「『櫛』に関する社会学的研究」で、質問項目は全部 18 問で、選択式と記述式の 2 種類である。表 2 に配布数と有効回答数を示した。

表 2　実施概要

	済寧技師学院	山口大学
アンケート実施人数	209 人	210 人
有効回答者数	209 人	209[5)]人

4.2　男女の櫛共用状況の特徴

本節では、櫛の共用についてのデータを整理分析し、技師学院と山口大学の調査対象における櫛の共用範囲に関する特徴を考察する。

アンケート調査の設問6で、「あなたは自分の櫛を他人と共用できますか」と調査対象者の櫛の共用意志を尋ねた。

櫛の共用について、技師学院は、男性は「はい」が60.7%、「いいえ」40.3%となっている。女性は「はい」84.9%、「いいえ」15.1%となっている。一方、山口大学は、男性は「はい」54.4%、「いいえ」45.6%となっている。女性は「はい」78.1%、「いいえ」21.9%となっている。

両方とも女性は男性より櫛の共用可能率が高い。つまり、データから見ると、女性は櫛を共用しやすいと考えられる。しかし、この共用可能率は共用の対象者を区別していない状況で算出した結果である。

では次に、共用対象者によって共用可能率がどう変わるかを見てみよう。

4.3　済寧技師学院

初めに、櫛共用への生理的嫌悪感を見ることにする。以下の図1は技師学院の男子学生で、図2は技師学院の女子学生である。この共用不可能率は櫛共用への生理的嫌悪感を示していると考えられる。

「あなたは自分の櫛を他人と共用できますか」に対して、男女を2つのグループに分け、各対象においての共用出来ない確率を算出した。記入していない人数を含めて算出したデータである。データは四捨五入で小数点以下1の位の数字を保留する形で表示した。

以下では、図1と図2を通して、技師学院のデータから分析していく。

図1　櫛共用への生理的嫌悪感（技師学院の男子学生）

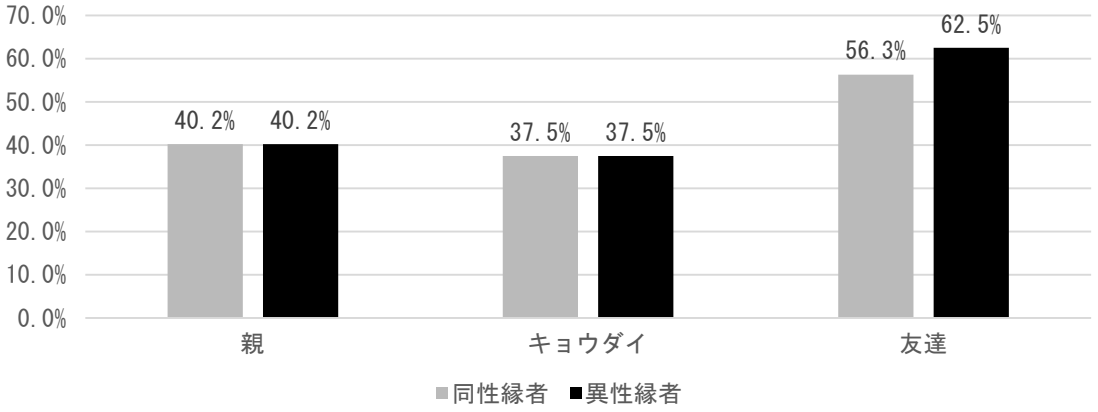
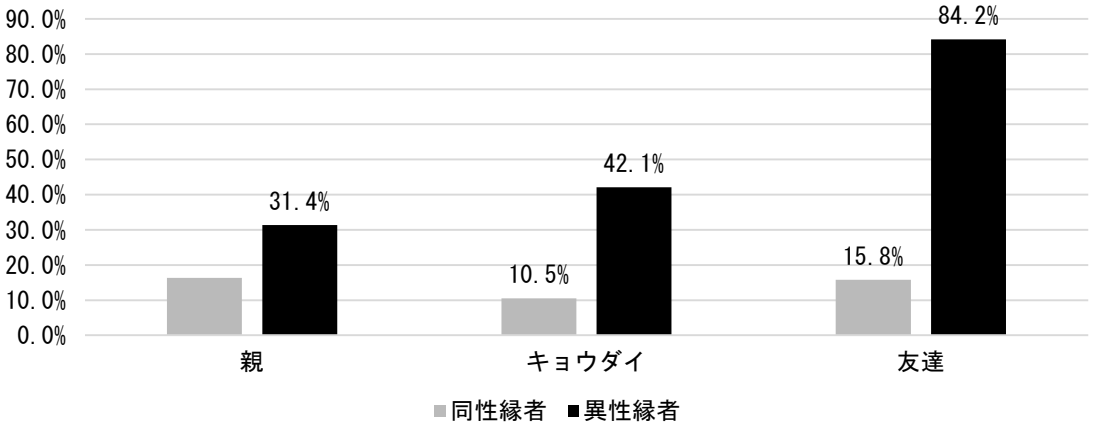


図2　櫛共用への生理的嫌悪感（技師学院の女子学生）



a　父と母への嫌悪感は同じ。
b　同性キョウダイと異性キョウダイへの嫌悪感は同じ。
c　異性友達への嫌悪感は同性友達より6.2%と高い。
d　異性縁者において、嫌悪感程度を高い順で並べると、異性友達＞母＞異性キョウダイとなる。
e　同性縁者において、嫌悪感程度を高い順で並べると、同性友達＞父＞同性キョウダイとなる。

技師学院の男子学生において、分析結果aとbから、父と母、同性キョウダイと異性キョウダイへの嫌悪感程度に差異がないことが示された。cから、同性友達と異性友達への嫌悪感程度に差異が大きいとは言えない。つまり、その生理的嫌悪感が性別による差異であることが指摘出来ないといえよう。dとeから、家族内（親とキョウダイ）への嫌悪感は家族外（友達）より弱いという傾向が見られることが指摘できる。

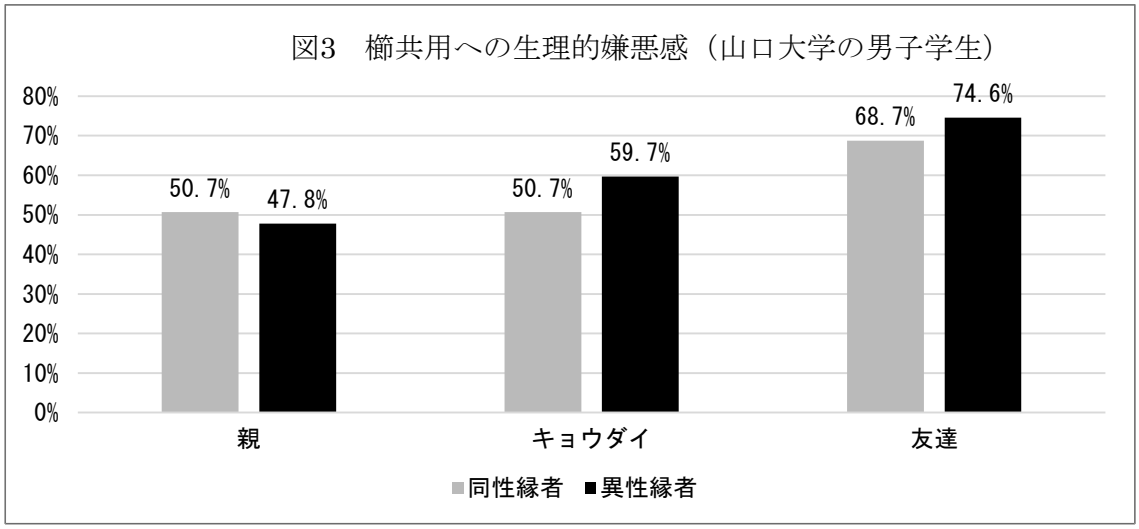
a　父への嫌悪感は母より15.1%と強い。
b　異性キョウダイへの嫌悪感は同性キョウダイより31.6%と強い。
c　異性友達への嫌悪感は同性友達より68.4%と強い。
d　異性縁者において、嫌悪感程度を高い順で並べると、異性友達＞異性キョウダイ＞父となる。
e　同性縁者において、嫌悪感程度を高い順で並べると、母＞同性友達＞同性キョウダイとなる。

技師学院の女子学生において、分析結果aとbから、櫛共用について父と異性キョウダイを嫌悪している傾向が見られる。 c から、櫛共用について異性友達を嫌悪している傾向が見られる。dから、家族内（父と異性キョウダイ）への嫌悪感は家族外（異性友達）より弱いという傾向が見られる。eから、同性縁者に対して、家族内（母と同性キョウダイ）と家族外（同性友達）への嫌悪感に大きな差異がないと指摘できよう。

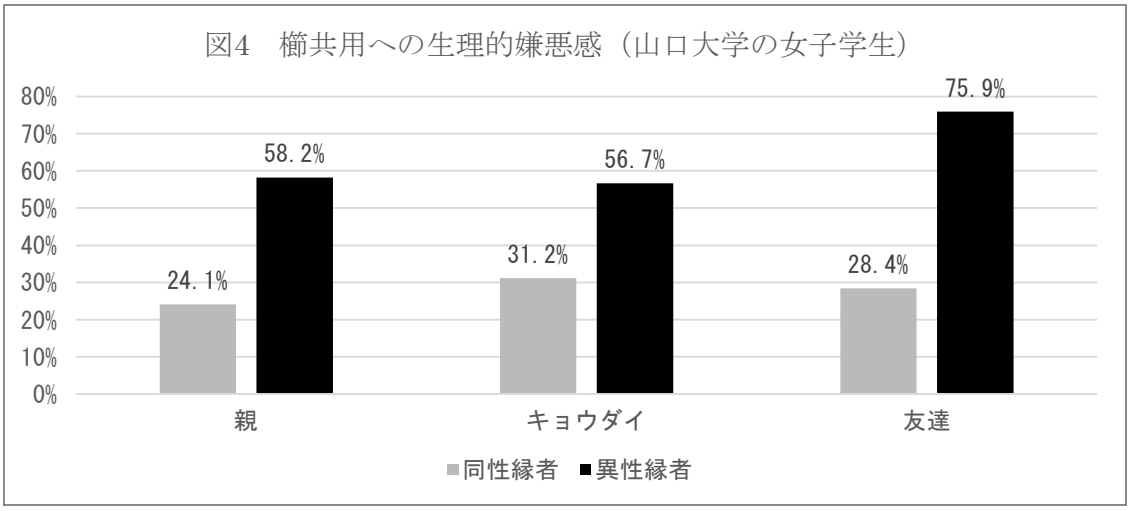
4.4　国立大学法人山口大学

続けて、山口大学の結果を提示する。図表3と図4を通して、山口大学のデータから分析していく。

a　父への嫌悪感は母よりわずか2.9%と強い。
b　異性キョウダイへの嫌悪感は同性キョウダイより9%と強い。
c　異性友達への嫌悪感は同性友達より5.9%と強い。
d　異性縁者において、嫌悪感程度を高い順で並べると、異性友達＞異性キョウダイ＞母となる。
e　同性縁者において、嫌悪感程度を高い順で並べると、同性友達＞父＝同性キョウダイとなる。



山口大学の男子学生において、分析結果aから、父と母への嫌悪感の程度は差異が少ない。bとcから、異性キョウダイと同性キョウダイ、異性友達と同性友達への嫌悪感程度にも大きな差異があるとは言えない。つまり、その生理的嫌悪感は性別によって差異がほとんどないといえよう。dとeから、家族内（親とキョウダイ）への嫌悪感は家族外（友達）より弱いという傾向が見られると指摘できよう。



a　父への嫌悪感は母より34.1%と強い。

b　異性キョウダイへの嫌悪感は同性キョウダイより25.5%と強い。

c　異性友達への嫌悪感は同性友達より47.5%と強い。

d　異性縁者において、嫌悪感程度を高い順で並べると、異性友達＞父＞異性キョウダイとなる。

e　同性縁者において、嫌悪感程度を高い順で並べると、同性キョウダイ＞同性友達＞母となる。

山口大学の女子学生において、分析結果aとbから、櫛共用について父と異性キョウダイを嫌悪している傾向が見られる。cから、櫛共用について異性友達を嫌悪している傾向が見られる。dから、家族内（父と異性キョウダイ）への嫌悪感は家族外（異性友達）より弱いという傾向が見られる。eから、同性縁者に対しては、dのような傾向が見えず、家族内（母と同性キョウダイ）と家族外（同性友達）への嫌悪感に大きな差異がないと指摘できよう。

5　櫛が媒介する生理的嫌悪感の考察

以下では、櫛が媒介する生理的嫌悪感をインセスト回避と「親密さ」という2つの視点から考察していく。

5.1　インセスト回避視点からの考察

アンケート調査から調査対象が特定の異性に対して櫛を共有することに拒否反応を示す傾向があることが示された。このため、櫛は生理的嫌悪感を媒介するモノと考えることができよう。ここでさらに複数の多角的な事例を取り上げ、データを補足的に説明することにしたい。

櫛が媒介する生理的嫌悪感は一体何に由来するであろうか。日常生活の中で、女性は父や異性キョウダイと共用したくないものは数多くある。一見すると、父親の匂いが付いていることが嫌悪感の原因と考えられるが、女性が父の車を運転することや、寒い時に父のコートを着るなど、状況や場合によって生理的嫌悪感が生じにくいことも起こりうる。たとえば、阿部洋子は東京都内 A 大学の 101 名女子学生にアンケート調査を行い、集めたデータを分析し、「父親に対する娘の嫌悪感は『両親の不仲』が背景にあるようである」（阿部　2017: 9）という分析結論を提示した。

人間を対象として議論する場合に動物のデータを用いることの妥当性は、進化生物学者にとっては自明のことであるが、社会学者にとってはそうではないと認識されてきた（J. Shepher 2013: 50）。だが、J・シェファーが述べるように、「1匹のオスザルが支配的なオスに『贈り物をする』としても、この行動を人間の同性愛の根源とみなすことは間違っている。しかしその類推を発見的な目的のために用いることは受け入れられる」（J. Shepher 2013: 50）のである。

したがって、櫛が媒介する生理的嫌悪感を解明するには、チンパンジーとゴリラの群れで起きた事例も有用であろう。先述した霊長類学者の山極はチンパンジーの家族、すなわちインセスト内における非対称な性関係について次のように述べる。

「タンザニアのゴンベ [6]でもマハレ [7]でも、チンパンジーの息子と母親、母親を同じくする兄弟姉妹でまれではあるが交尾は起こっている。そのほとんどはオスの方が交尾を誘い、メスは拒否しようとしている。兄が妹を追いかけて交尾を強要した例も知られている」と指摘する（山極 2012: 152）。つまり、オスのチンパンジーは近親的なメスとの交尾に嫌悪

感を示さず、むしろ（場合によっては）積極的に求めていることが分かる。議論を整理するため、改めて①～②というアンケートデータの特徴を 2 つ挙げておく。

① 技師学院の男子学生は、父と母、同性キョウダイへと異性キョウダイへの嫌悪感程度に差異がない。家族内では、その生理的嫌悪感は性別による差異がほとんどないといえる。
② 山口大学の男子学生は、父と母への嫌悪感程度に差異が少ない。異性キョウダイと同性キョウダイへの嫌悪感程度に大きな差異があるとは言えない。家族内では、その生理的嫌悪感は性別による差異がほとんどないといえる。

山極が提示したチンパンジーの交尾の事例、そして技師学院と山口大学のアンケートデータを敢えて並置的に並べると、技師学院と山口大学の男子学生は今回の調査データに限って言えば、①と②から、家族内では、母と異性キョウダイとの共用を生理的に嫌悪していないことから、オスのチンパンジーと類似するとまではいえないが、同じく異性を回避していないという点は非常に興味深いことである。

さらに、山極は「ゴリラのオスは離乳期にある幼児を母親からあずかって子育てをするので、父親と娘のような関係が作られる。そのあいだに、母親と息子のような交尾回避が起こる。父親も娘も双方が交尾を避けようとするが、娘のほうがより強く避ける傾向があるという報告があった」と指摘している（山極 2012: 153-154）。考察のために、ここでは③～⑥という 4 つのデータ分析の特徴を挙げる。

③ 技師学院の女子学生において、櫛共用について父と異性キョウダイを嫌悪している傾向が見られる。
④ 山口大学の女子学生において、櫛共用について父と異性キョウダイを嫌悪している傾向が見られる。
⑤ 技師学院の女子学生において、異性縁者に対して、家族内（父と異性キョウダイ）への嫌悪感は家族外（異性友達）より強いという傾向が見られる。同性縁者に対して、家族内（母と同性キョウダイ）と家族外（同性友達）に大きな差異があるとは言えない。
⑥ 山口大学の女子学生において、異性縁者に対して、家族内（父と異性キョウダイ）への嫌悪感は家族外（異性友達）より強いという傾向が見られる。同性縁者に対しては、そういう傾向が見られず、家族内（母と同性キョウダイ）と家族外（同性友達）に大きな差異があるとは言えないと指摘できる。

ゴリラの交尾事例から、技師学院と山口大学のアンケートデータ分析が示した特徴③と④を考察すると、技師学院と山口大学の女子学生とも生理的に父と異性キョウダイとの共

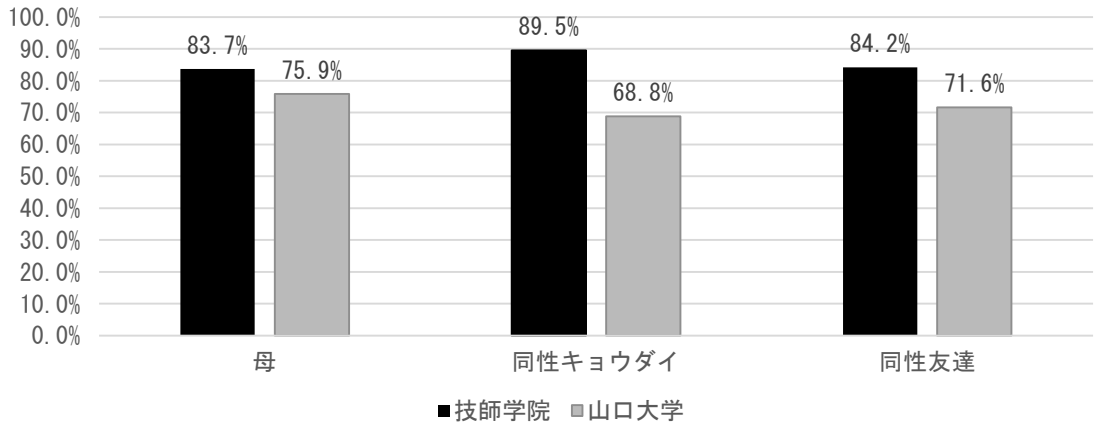
用を嫌悪する傾向は、ゴリラ娘の交尾回避現象と類似しているといえる。もちろんこれらの調査データが提示された社会的コンテクストも無視はできないが、異なった文化的背景をもつ2集団から同じような結果が出たことは非常に示唆的である。

しかし、データの分析が示した特徴⑤と⑥を考察すると、インセスト回避特徴に合わない特徴も示された。つまり櫛をインセスト回避の媒介物であるとした場合、異性友達を生理的に回避することはなく、家族内（父と異性キョウダイ）への嫌悪感は家族外（異性友達）より強い傾向をみせるはずだが、データ分析の結果は逆で、家族内（父と異性キョウダイ）への嫌悪感は家族外（異性友達）より弱いという傾向が示された。

以上の分析から、櫛共用に関して生理的に回避する現象が現れたことが明らかとなった。今回の調査データに限って言えば、櫛が媒介する生理的嫌悪感のいつくかの特徴はゴリラの群れのインセスト回避特徴と類似するところがあるが、技師学院と山口大学の女子学生とも、家族内（父と異性キョウダイ）への嫌悪感は家族外（異性友達）より弱いというインセスト回避原理と相違する特徴もある。そのため、櫛が媒介する生理的嫌悪感はインセスト回避だけではなく、他の要因も大いに考えられ得る。これはモノとしての櫛が、必ずしも常に完全に性的関係を孕むものではないということ、また家族内での「親密さ」という指標が櫛の共有を促すという可能性が考えられる。以下では、「親密さ」という観点からさらに考察を加えていく。

5.2　「親密さ」の観点からの考察

図5　同性縁者との櫛共用可能率（女子学生）



技師学院と山口大学学院の女子学生データを分析する際、両方の女子学生とも同性友達との共用可能率が高いという特徴がある。つまり、同性友達との共用意志が高いまた同性友達への嫌悪感が低い可能性があると考えられる。そのため、本節では櫛が媒介する生理的嫌悪感の差異が「親密さ」の現れ、あるいは櫛が「親密さ」を媒介するモノでもあるという可能性を考察する。

まず、両方の女子学生は同性縁者に対する櫛共用の可能率に関するデータを提示する。

a　技師学院において、同性友達との共用可能率は母より高い。

b　山口大学において、同性友達との共用可能率は同性キョウダイより高い。

分析結果 a、b を合わせてみると、両方の女子学生は、両方の男子学生とは異なり同性縁者に対し同性友達が、最も共有可能率が低い対象にはなっていないことが窺える。

第 3 節で述べたことの繰り返しになるが、山極はチンパンジーやゴリラの毛づくろいは一種の互酬的な行動であるという。そしてその互酬的な行動を通して、親密な関係を築くという社会的な視点を提示した（山極 2012: 229―230）。またダンバーは人間に対して、触れ合いは人にとってとても重要であること、触れ合いによって、エンドルフィンが放出されることを指摘した。さらに、彼は人間の場合、言葉も一種の遠隔的な毛づくろいであり、いろんな意味で毛づくろいと同じ役割を果たすという生理的な視点を主張した（R. Dunbar 2011: 66）。

両方の女子学生とも同性友達との共用可能率が高いという特徴から、櫛が一種の毛づくろいの媒介物だという可能性があると筆者は考える。

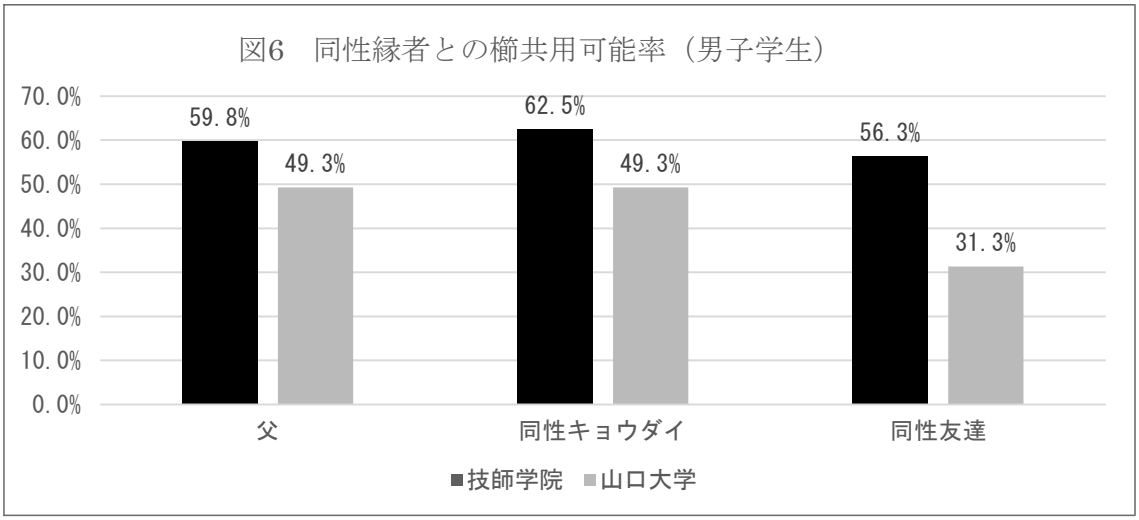


図 6 は技師学院と山口大学の男子学生の同性縁者に対する櫛共用の可能率に関するデータである。図 6 から、山口大学の男子学生は同性友達との共用可能率は父と同性キョウダイより 18%と低いという特徴がある。つまり、同性友達への嫌悪感が父と同性キョウダイよりも高い。それに対して、技師学院の男子学生は同性友達との共用可能率は父と同性キョウダイより低いが、三者の共用可能率には大きな差異があるとはいえない。つまり、同性友達への嫌悪感は父と同性キョウダイと大きな差異がなく、女子学生と似ている特徴が示された。このことから技師学院と山口大学の男子学生に現れた同性友達への嫌悪感の特徴には差異があることが分かる。技師学院の男子学生は同性縁者との共用可能率には差異が少ない一方、山口大学の男子学生は同性縁者に対して、家族内（父と同性キョウダイ）との共用可能率は家族外（同性友達）より高いことが示された。技師学院にみられたこの

特徴は、女子学生においても同様であったため、社会的コンテクストや文化的な背景が、調査結果に作用した可能性が考えられるが、本データからのみではそれを「親密さ」とまでは断定できないため、あくまで「親密さ」に起因する可能性が示されたと述べるにとどめておく。

6　おわりに

本稿ではインセスト回避と「親密さ」に関する先行研究を概観した後、櫛の共有に関するアンケート調査の結果を提示し、中国（漢族）と日本において、櫛が媒介する生理的嫌悪感に対して考察を行った。結論として、以下の2点を指摘することができた。

1つ目は、櫛が媒介する生理的嫌悪感のいつくかの特徴は哺乳類のインセスト回避特徴と類似することがあるという点である。しかし、技師学院と山口大学の女子学生は、家族内（父と異性キョウダイ）の嫌悪感は家族外（異性友達）より弱いというインセスト回避原理と相違する特徴も見られた。そのため、櫛が媒介する生理的嫌悪感は単純なインセスト回避ではなく、社会的・文化的背景、そして「親密さ」という観点を孕んだインセスト回避傾向と見做すことが可能である。

2つ目は、技師学院と山口大学の女子学生のデータ分析の特徴から見ると、櫛が「親密さ」を媒介するモノとしての特徴が見られ、その可能性が示された。しかし山口大学の男子学生のデータから、櫛が媒介する生理的嫌悪感の差異を、単純に「親密さ」の問題とすることはできないことも同時に示された。

総じていうと、今回のアンケート調査分析結果だけで櫛が媒介する生理的嫌悪感を、インセスト回避現象また「親密さ」の問題と断定するのはあまりにも性急である。しかし、本アンケート調査データに限って言えば、櫛が媒介する生理的嫌悪感が文化や社会的背景を越えて現れた現象であること、そして櫛がある程度インセスト回避と「親密さ」を示す指標として作用したことは否定できない。つまり本稿において櫛は、生理的嫌悪感、あるいは「親密さ」を媒介するモノである可能性が大いに示されたのである。このことはこれまでの研究結果を補完しうる1つの重要な事例になりうるものであると考えられる。

謝辞

終始熱心なご指導を頂いた高橋征仁教授、小林宏至准教授に感謝の意を表します。

高橋征仁教授は分析にあたり，データの解析にご協力をいただいたばかりでなく，貴重な時間をさいて私の研究および論文の改訂について貴重な意見を提出して頂き、本当にありがとうございました。

小林宏至准教授は調査の始まりから、論文作成まで一字一句丁寧に訂正し、コメントして頂き本当にありがとうございました。

［注］

1）ア・プリオリ；中世スコラ哲学では、因果系列の原因あるいは原理から始める認識方法をいい、カント以後の近代認識論では、経験に依存せず、それに先立っていることをさす。（出所：CD-ROM 版『大辞泉』第 1 版東京：小学館）

2）「近親婚」は「インセスト」の旧訳である。

3）クラン：『人類』クラン、（1）母系支族、（2）同祖観念を持ち、単系出自で結ばれた血縁集団。（出所：『小学館ランダムハウス英和大辞典』第一巻 1973：472）

4）ダイアド：2 個 1 組、2 個群［a group of two］、1 対，カップル［pair, couple］のことである。（出所：『小学館ランダムハウス英和大辞典』第一巻 1973：784）

5）　このアンケート調査の結果では、正しく答えていない結果や答えられなかった回答を欠損値として処理した。そのため、項目ごとに一部不完全な回答もあり、各設問の有効回答は必ずしも一致していないが、調査の目的に一致する限り、回答データをそれぞれの項目集計に入れている。その内、2018 年 4 月 9 日のアンケートのうち 1 人が、2 枚目および 3 枚目の回答用紙が紛失した状態であったため、該当者のアンケートを無効にした。

6）タンザニアにある、ゴンベ渓流国立公園。

7）タンザニアにある、マハレ山塊国立公園。

［文献］

阿部洋子, 2017, 父親に対する娘の嫌悪感, コミュニケーション文化 10 号, pp.1-10

Badcock, C.R. , 2002, *Incest. In Erwin, E. (Ed.) The Freud Encyclopedia： Theory, Therapy and Culture,* New York：Routledge

Colman, A. M. ,2001, *A Dictionary of the Social Sciences,* Oxford University Press

Dunbar, R. , 2011, 藤井留美訳, 『友達の数は何人？』株式会社　インターシフト

Frazer, J.G. , 1910, *Totemism and Exogamy. Vol. 4.* New York：Macmillan

Freud, S. , 1950, *Totem and Taboo,* New York：　Norton (First ed. 1913)

Lévi-Strauss, C. , 1977, 『親族の基本構造（上）』番町書房

Lévi-Strauss, C. , 1977, 『親族の基本構造（下）』番町書房

Lundström, J. N. and Boyle J. A. , Zatorre R. J. , Jones-Gotman M. , 2009, *The neuronal substrates of human olfactory based kin recognition,* Hum Brain Mapp. Aug;30(8)：2571-2580

Malinowski, B. , 1927, Sex and Repression in Savage Society, London：　Routledge & Kegan Paul

Mead, M. , 1968, *International Encyclopedia of the Social Sciences. Vol.7.*

Parsons, T. , 1954, *The Incest Taboo in Relation to Social Structure and the Socialization of the Child,* British Journal of Sociology 5：101-117

Shepher, J. , 1983, 『インセスト―生物社会的展望―』学文社

Turner, H. J. , 2012, 『インセスト近親交配の回避とタブー』明石書店

Westermarck, E., 1891, *The History of Human Marriage.* London: Macmillan

山極寿一, 2012, 『家族進化論』東京大学出版会

楊雄, 2006, 『青春期与性—中国大城市青少年性意識性行為跟踪研究』, 上海大学：博士論文

所属：山口大学東アジア研究科

E-mailアドレス：327779357@qq.com